



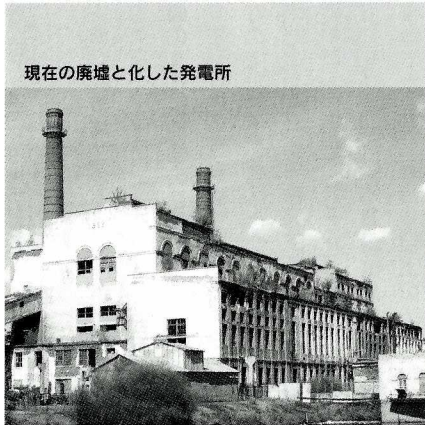
モンゴルの「産業遺産」

前川 愛 (まえかわ あい)

本館外来研究員

工業化のシンボル

一九二一年に世界で二番目の社会主義国になるまで、モンゴル国では近代化の意味での工業はなかった。社会主義の思想の下に、遊牧社会に「工業」を産業として確立すべく、首都ウランバートルに大規模な資本が投じられたのである。それ以前のウランバートルは、寺院を核とす



現在の廃墟と化した発電所



操業当時(1960年代)。

国立映画・写真・音声アーカイブズ所蔵

る門前町に、ユーラシア大陸の交易中継の機能が加わった程度でしかなかった。もし、モンゴルが社会主義を経験しなかったならば、都市の建設と工業化は、これほどの規模では生じなかつただろう。

国^{こく}是である工業化を実現させるため、初の大規模発電所がソ連の援助で建設された。発電所は一九三四年に操業し、「中央電力コンビナート」とよばれ、一九八〇年代まで工業開発や都市生活の近代化を進める電気を生み出していた。

発電所は工業化のシンボルのひとつとして、国家的な記録媒体にその姿が多く残されている。工業成長のエネルギーを生み出す、輝かしい役割を強調するために、写真や映画に写されているのだ。一九四八年には発電所に、革命の英雄の名前「スフバートル」がつけられるなど、まさに「国家成長の熱源」としての表象を見ることが出来る。

物質としての存在感

わたしはこの発電所をウランバートルでおこなわれた東京大学の近代建築調査に参加して知った。第二、三、四発電所に役割を引き継ぎ、現在は廃墟のまま放置されている。公式には国有財産だが、敷地内に廃材集めの中国人が作業所を開いて占有しているために、所有状態は不安定だ。建物と土地がいつ国有財産私有化リストに入れられてもおかしくない。

この建物のもつ物質としての存在感の大きさと美しさに、わたしは圧倒されてきた。モンゴルを訪れる度に、壊されていないかを確かめている。建築家や写真家の友人がモンゴルに来れば必ず連れて行って見せ、モンゴルで事業をしている人たちにも建物を保存しつつ再生する方法がないかを相談してきた。多くの人はそのアバンギャルドな美しさに興奮し、何故こんなものがここに？と驚く。

発電所のことを調べるうちに、モスクワにとてもよく似た発電所があることがわかった。スターリン様式の代表的な建築家であるシヨルトフスキーが設計した第一発電所である。ソ連の工業化政策を徹^{てい}て、モンゴルでまったく同じものが作られた可能性は大きい。あるいはソ連邦各地や他の社会主義国にも同じ設計で建設されたかもしれない。この発電所は社会主義という思想によって、世界に同時に流通した物質文化があつたことを示している。

この発電所をモンゴル近代化の記憶を想起する遺産として残し、再生する、という試みをモンゴルでさまざまな人たちが考えてみたい。モンゴル初の「産業遺産」の議論を始めることになるだろう。実際に保存できるめどはまだたっていないけれども、その果たした歴史的役割を考えると、この発電所こそはモンゴルにおける産業遺産の議論の「始動機」としてふさわしいのではないだろうか。